

## 第VII部

### 複主体

第VII部では日本語の大きな特徴の一つである複主語の問題を構造伝達文法の立場で扱う。「AはBが～」という構文で、A, Bが共に主格にある場合の深層構造の形式とその描写法について、構造形式別に考える。

第19章では、ある主体が「単位構造を属性とする構造」を扱う。

属性が形容属性、断定属性、動属性である3つの場合の構造形式を説明し、第1～第8の特徴について述べる。

第20章では、「複主体が同一属性に立つ構造」を扱う。やはり3種類の構造形式に分けて、それぞれの特徴に触れながら説明する。

第21章では、「態を含む構造」「上置き構造を伴う構造」を扱う。

複主語をどう構造表示し、どう描写するのかを説明する。

## 第19章

# 単位構造を属性とする構造

### 19.1 複主体

日本語には主語(主体)が二つある文がある。たとえば、

象が鼻が長い。 (象の)は鼻が長い。)

という文では、「象」と「鼻」という二つの名詞が主語の形式「～が」をとり、「長い」という述語に対して二つの主語となっている。

主語が二つ、あるいはそれより多くの文の深層構造はどのようにになっているのだろうか。その描写法はどうなっているのだろうか。構造形式別に考えてみることにしたい。

ところで、このような文はふつう「象が鼻が長い。」ではなく「象は鼻が長い。」というふうに「～は～が～。」という形で実現する(表層化する)ことが多い。それで、「～は～が～。」という形も( )に入れて併記することにする。

ここで使用される「 $\emptyset$ 」…ゼロイチ…という記号が本来的な主格を示す格詞であることについては 2.2 を参照。

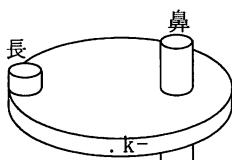
「～は」と「～が」の違いについて、また、「は」が「実体ふちどり描写」機能をもつ「相対化描写詞」であることについては第3章に述べた。ただし、この第VII部においては「は」のふちどり機能を構造図上に示すことは省略する(3.1③、図3-9)。

## 19.2 ある主体が単位構造を属性とする構造……3種類の構造

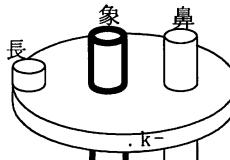
## 1) 形容属性(形容詞)の場合の構造

19-1) 象が鼻が長い。 (象 $\emptyset_1$ は鼻が長い。)

この文の深層構造は、「象」という主体が「鼻が長い」という属性をもつ形式として理解できる。「長い」は「形容属性(形容詞)」である<sup>\*1</sup>。



(属性主体)



(本主体)(属性主体)

図19-1 鼻が長い(単位構造)

図19-2 象 $\emptyset_1$ は鼻が長い

この属性「鼻が長い」(図19-1)では、主述の関係が成立し、単位構造<sup>\*2</sup>を形成している。それで、19-1)の深層構造は、ある主体(象)が、単位構造全体(鼻が長い)を属性として保持する形式となる(図19-2)。

結果として一つの属性(長い)に二つの主体(象・鼻)が立つ構造になるわけだが、ここに現れる二つの主体は性格が若干異なっている(19.3参照)。そこで、図19-1のように全体で属性となる単位構造の中にある主体(鼻)を「属性を構成する主体」、「属性主体」と呼び、一方のその単位構造全体を属性として保持する「主体」(象)を「本主体」と呼ぶことにし(図19-2)、この両者を名称の上で区別する。

したがって、格としての主格も細分し、「本主格」と「属性主格」を設ける。(このそれぞれに $\emptyset_1$ 格、が格が可能である。2.2参照。)

構造図示においては、本主体は太線の円柱で表す(図19-2)。簡略図示では、

\*1 形容属性の構造表示法については、第8章 形容詞 参照。「.k-」は「形容辞」で、「形容実詞(形容実体)」と融合して「形容詞」を形成する。

\*2 「単位構造」……一つの属性と、それに関わる一つの主体より成る单位的構造。  
9.1 1) 参照。

属性となる単位構造を細線で表示し、本主体を太線で表示する(図19-3, -4)。

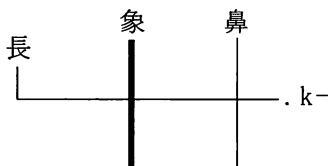


図19-3 象の鼻は長い



図19-4

こうすることによって、19-1〉の構造はこう表現することができるようになる。「形容属性『長い』は、属性主体として『鼻』を保持し、本主体として『象』を保持している。」

なお、感覚形容属性は別の扱いを受ける(第20章参照)。

## 2) 断定属性(断定基)の場合の構造

19-2〉 彼が父親が公務員だ。 (彼の)は父親が公務員だ。)

この文の深層構造は「彼」という主体が「父親が公務員である」(図19-5)という単位構造を属性にもつ形式である(図19-6)。

「公務員である」の部分は「公務員」という実体と「である」という断定基から成り立っている。「である」と「だ」は同一構造をもつ断定基であって、描写法が異なっているだけである(11.1①②)。

この構造では、「(公務員で)ある」という一つの属性に「彼」と「父親」の二つの主体が立つことになる。本主体が「彼」であり、属性主体が「父親」である。

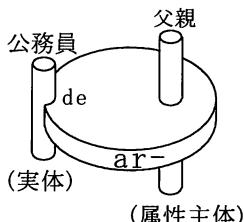


図19-5 父親が公務員だ(単位構造)

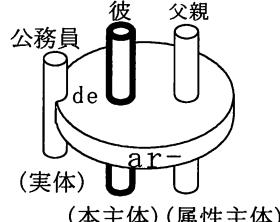


図19-6 彼の)は父親が公務員だ

いわゆる形容動詞の文、たとえば「彼の<sub>i</sub>は父親が健康だ」は同様の構造としてとらえることができるが、格移動のある点が異なる<sup>\*1</sup> (20.3参照)。

また、意味を保ちながら、de格にある実体と属性主体とを置き換えることができる場合がある。たとえば、

19-3) 彼の<sub>i</sub>は読書が趣味だ。

と描写できる構造(図19-7)は、de格実体「趣味」と属性主体「読書」を入れ換えて、

19-4) 彼の<sub>i</sub>は趣味が読書だ。

と描写できる構造(図19-8)に変えることができる。

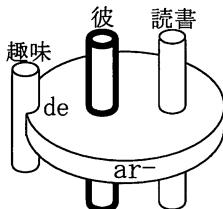


図19-7 彼の<sub>i</sub>は読書が趣味だ

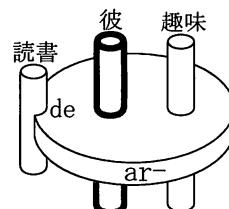


図19-8 彼の<sub>i</sub>は趣味が読書だ

もちろん、19.3[特徴1]の条件……属性主体は本主体と明瞭な関連をもつものでなければならない……を満たしている必要がある。

なお、感覚断定属性は別の扱いを受ける(第20章)。

\*1 いわゆる「形容動詞」の国文法での「活用」の構造形式にも触れておく。

形容動詞とされているのは下線の部分である。

未然形 静か-d=ar-oo (当文法では -oo は一つの描写詞である。)

連用形① 静か-d=ar-i=t-θ=a- (促音便となる。)

連用形② 静か-de (=ar-i) (=ar-i の部分は常に省略される。)

連用形③ 静か-ni (「に格」に格移動。属性は自由に選択可。)

終止形 静か-d=a(r-u) (r-u の部分は常に省略される。)

連体形 静か-n=a(r-u) (r-u の部分は常に省略される。)

仮定形 静か-n=ar-a(ba) (-aba の ba は、省略されることもある。)

「d」は格詞「de」の、「n」は格詞「ni」の母音の脱落形である。

国文法のような表層レベルの文法では、このような「活用表」で整理する。

深層構造から見ると、「de格」と「ni格」での相補分布になっている。

## 3) 動属性(動詞)の場合の構造

19-5) 田中さんが長男が結婚する。(田中さんは長男が結婚する。)

この文の深層構造は、「田中(さん)\*1」という主体が「長男が結婚する」(図19-9)という単位構造を属性として保持する形式になる(図19-10)。ここでは、「(結婚)する」という動属性の上に「田中(さん)」という本主体と、「長男」という属性主体の2主体が立っている。

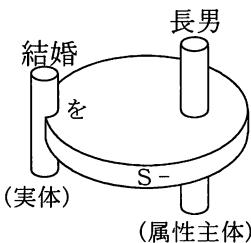


図19-9 長男が結婚する  
(単位構造)

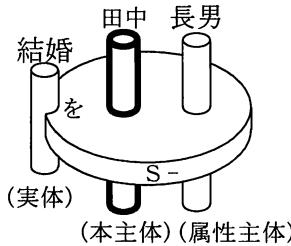


図19-10 田中さんは長男が結婚する  
(単位構造)

同様に、「気がつく」のような慣用句を含む文の構造にも複主体がある。

19-6) 五郎が後ろにいる男に気がつく。(五郎さんは後ろにいる~。)

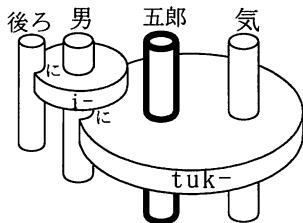


図19-11 五郎さんは後ろにいる男に気がつく

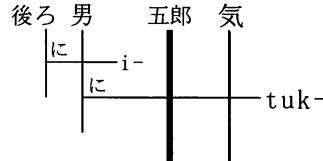


図19-12

ここでは「つく」という動属性の上に、「五郎」という本主体と、「気」という属性主体が立っている。

このような文は実際には「気がついた」のような過去ないし完了の文とし

\*1 「田中さん」の「さん」は「(待遇)描写詞」であり、構造とは関係がない。第5章部分描写詞 表5-6参照。

て実現することが多いと思われるが、ここではテンスやアスペクトは捨象して考えている。

以上、形容属性、断定属性、動属性の場合の複主体構造形式を概観した。

### 19.3 この構造の特徴……8つの特徴

**[特徴1] 明瞭な関連……属性主体として可能なのは、本主体と明瞭な関連をもつ実体である**

「本主体」(象に当たるもの)は、それについて何かを述べようとする実体(名詞)であるから、話者がそれについて何かを述べようとするものであれば、何でも「本主体」にできる。

一方、「属性主体」(鼻に当たるもの)にすることができる実体(名詞)は何でもよいというわけではない。判断者(話し手)が本主体と関連をもつと考える実体で、しかも被伝達者(聞き手)がそれがどんな関連であるのかを推測できるような実体でなければならない。これを「本主体と明瞭な関連をもつ実体」ということにする。明瞭な関連とは多くの場合、「全体と部分、所有・所属関係、その比喩、それに準ずるもの」としての関連である。

たとえば、「窓」というものは、象と関連をもつとは考えられないので、

19-7〉 \*象が窓がかわいい。 (\*象のは窓がかわいい。)

というのは非文となる。しかし、ある場合、たとえば幼稚園の送迎バスが象を模したものであるような場合であれば、正しい文となる。

19-8〉 この象が窓がかわいい。 (この象のは窓がかわいい。)

これが可能となったのは、被伝達者(聞き手)にも、属性主体「窓」が本主体「象」と関連をもっていると見なせるようになったからである。

そこで、構造図19-2を補うことにすれば、たとえば図19-13,-14のようなものとなる。

19-9) 象が(象がもつ)鼻が長い。

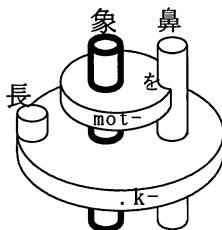


図19-13 象の<sub>1</sub>は鼻が長い

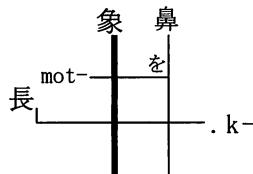


図19-14

このような構造図にすることにより、属性主体「鼻」は本主体「象」に対して関わりをもっていることが明瞭となる。判断者(話し手)の深層構造においてはこのように、属性主体は構造上のどこかで本主体と関わっていかなければならない。

一方、被伝達者(聞き手)は、伝達された表層文から構造上での両者の関連のあり方まで再現できるのでなければ、その表層文の理解には至らない。

たとえば、ある判断者(話し手)が当然のこととして構築した判断構造から、次のような表層文を描写したとしよう。

19-10) 空が指が太い。 (空の<sub>1</sub>は指が太い。)

19-11) 富士山が島が純白だ。 (富士山の<sub>1</sub>は島が純白だ。)

19-12) 川がドアが開く。 (川の<sub>1</sub>はドアが開く。)

被伝達者(聞き手)はこれらの文中の属性主体(指、島、ドア)が本主体(空、富士山、川)とどのような関連をもつかを瞬時探索するが、結局分からず、両者の関連を構造上に再現することができない。判断者にとっては正常な文でも、明瞭な関連がないために被伝達者にとっては非文となっている。

これに対し、属性主体が本主体と明瞭な関連をもっている場合は、次のように構造再現に支障がない。

19-13) 東京が人口が多い。 (東京の<sub>1</sub>は人口が多い。)

19-14) 彼が発音が明瞭だ。 (彼の<sub>1</sub>は発音が明瞭だ。)

19-15) ぼくがオシッコが出る。 (ぼくの<sub>1</sub>はオシッコが出る。)

ここでさらに、否定文の場合についても触れておく。否定文の場合、明瞭な関連はその適用範囲が拡大する。

- 19-16) 象が翼がない。 (象 $\theta_1$ は翼がない。)

「象」と「翼」は明瞭な関連をもっていない。しかし、この文は非文ではない。否定文では、本主体(象)を何か別のもの(鳥)と比較したりすることによって、比較される相手(鳥)とその属性主体(翼)がもつ関連を取り込み、その取り込んだ関連を否定するからである。このように、否定文では「明瞭な関連」は適用範囲が拡大する。

他の例も挙げておこう。

- 19-17) 象が英語が必修ではない。(象 $\theta_1$ は英語が必修ではない。)

- 19-18) 村田さんが蹄が伸びない。(村田さん $\theta_1$ は蹄が伸びない。)

なお、「懐かしい」(20.2), 「好きだ」(20.3), 「分かる」(12.3), 「話せる」(12.4.1), 「見える」(12.4.1), 「食べられる」(12.5.3)), 「できる」(20.4)等々、構造の異なるものについては、当該個所を参照されたい。

### [特徴2] 「の」によるつなぎ描写① 「本主体」→「属性主体」

……この構造を完結した「文」として描写する場合、「の」によるつなぎ描写は、「本主体」→「属性主体」の方向のみ有効。「の」はある構造上の実体と実体をつないで描写するために用いられ、構造図上では矢印で表現される(4.2.3))。「の」で構造上の2主体をつなぎ、構造全体を文として完結して描写する場合は、つなぐ方向が決まっていて、「本主体」→「属性主体」の方向でなければならない。逆方向は非文となるか、意味(構造)を変えてしまうことになる。

- 19-19a) 象の鼻が長い。(図19-15)

- 19-19b) \*鼻の象が長い。(図19-15)

- 19-20a) 彼の父親が公務員だ。(図19-16)

- 19-20b) ?父親の彼が公務員だ。(図19-16)(意味・構造が変化。)

19-21a) 田中さんの長男が結婚する。 (図19-17)

19-21b) ?長男の田中さんが結婚する。 (図19-17) (意味・構造が変化。)

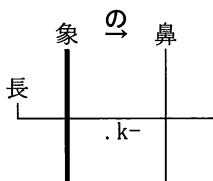


図19-15

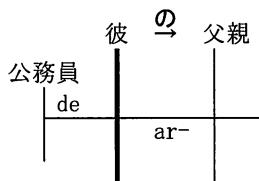


図19-16

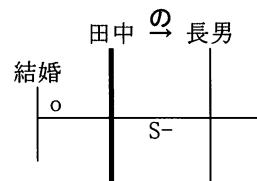


図19-17

どうしてこういう現象が生ずるのだろう。同じ属性に立つ主体どうしなのに、なぜ「本主体」→「属性主体」のつなぎ方が可能で、逆方向が不可能なのか。

これは、この構造形式では、本主体「象」があくまでも単位構造「鼻が長い」全体を属性としていることに原因がある。本主体「象」にとっては「鼻が長い」全体が属性なのであるから、「長い」という单一属性(主体をもたない属性)だけを属性としているかのような描写「象が長い」は、構造の正確な伝達をもたらさない(「彼が公務員だ」「田中さんが結婚する」も同様)。別の構造から描写される表層形式になってしまい、意味を変えてしまう。

この構造では、本主体(象)が单一属性(長い)のみを属性として保持しているかのような描写をすることはできないのである。

このことを先の例と、新たな例で確認しておこう。以下の a では「属性主体」が单一属性の主体として描写されているので正しい文となっており、 b では「本主体」が单一属性のみの主体であるかのように描写されているので非文となるか、意味を変化させている。

19-22a) 彼の子どもが小さい。 19-22b) \*子どもの彼が小さい。

19-23a) 東京の人口が多い。 19-23b) \*人口の東京が多い。

19-24a) 茄子の色が紫だ。 19-24b) \*色の茄子が紫だ。

19-25a) 彼の発音が明瞭だ。 19-25b) \*発音の彼が明瞭だ。

19-26a) 彼の目が利く。

19-26b) \*目の彼が利く。

19-27a) ぼくのオシッコが出る。 19-27b) \*オシッコのぼくが出る。

### [特徴3] 「の」によるつなぎ描写② 属性による実体修飾

……属性で実体修飾をする場合は、「の」によるつなぎは双方향が可能となる

[特徴2]では「の」によるつなぎは「本主体」→「属性主体」の方向しか許されなかつた。しかし、属性で実体を修飾して描写する場合(4.2.2))には、逆方向(「属性主体」→「本主体」)の「の」によるつなぎも可能となる。

19-28a) 象の長い鼻 (「本主体」→「属性主体」)

19-28b) 鼻の長い象 (「属性主体」→「本主体」)

19-28a) では、「の」により「象」と「鼻」の関連が描写され、属性「長い」がその属性の持ち主「鼻」を修飾しているのであるから何の問題もない。

19-28b) では、「鼻」と「長い」が別々にではあるが、結果として一体の単位構造として「象」を修飾している。(もし「鼻の」がなければ、「長い象」となって、構造の正確な伝達は不可能。) 単位構造「鼻が長い」全体が、その単位構造を属性とする本主体(象)を修飾するのであるから、「鼻が長い象」と同様、自然な描写であるといえる。以下の例でも同じことがいえる。

19-29a) 彼の公務員である父親 (「本主体」→「属性主体」)

19-29b) 父親の公務員である彼 (「属性主体」→「本主体」)

19-30a) 田中さんの結婚する長男 (「本主体」→「属性主体」)

19-30b) 長男の結婚する田中さん (「属性主体」→「本主体」)

実体修飾描写を伴う「の」によるつなぎでは、正しい構造形式が伝達・再現できるので、双方향のつなぎが可能となるのである。

[特徴4] 「の」によるつなぎ描写③

……本主体はそれと特定できる実体であるべきである

[特徴3]のようなことがいえるのは、あくまでもどちらが本主体で、どちらが属性主体であるかが明瞭な場合である。この区別が不明瞭な場合には二義を生じ、構造の正しい形式が再現しにくくなる。

19-31a) 妻の賢い弟(はその危機を乗り越えることができた。)

19-32a) 親友のフリーターである息子(は就職を考えない。)

19-33a) 姉の結婚する娘(が泣いている。)

これらの例では、だれが賢く、だれがフリーターか、だれが結婚するのか、決しがたい。(下線部の構造は、それぞれ図19-2、図19-6、図19-10参照。)

本主体(象)はそれとして特定できるもの、属性主体(鼻)は本主体との関連において表現されるものであるべきなのに、上の例では、本主体までもがある関連においての表現でしか表されていない。

上の例では、だから、本主体の方を特定化すればよいはずである。

19-31b) 敏子の賢い弟(はその危機を乗り越えることができた。)

19-32b) 親友のフリーターである大輔(は就職を考えない。)

19-33b) 彼女の結婚する娘(が泣いている。)

このように、どちらが本主体で、どちらが属性主体であるかが明瞭になれば、構造の再現(理解)に混乱が生じなくなる。

なお、実体修飾形式の後、「本主体」→「属性主体」の方向で主体どうしを直接につなぐ描写法では、二義を生じる場合があることにも触れておく。

19-31c) 賢い敏子の弟

19-32c) フリーターである大輔の親友

19-33c) 結婚する彼女の娘

これは、本主体と属性主体が属性に対して意的的に同等の権利を主張する場合([特徴6]参照)に生ずる現象である。この描写法は避けるのが賢明である。

### [特徴5] 属性主体を主題化しない場合

……単位構造はまとめて描写した方がよい

[特徴2]から、本主体(象)がその单一属性(長い)のみを属性として保持しているかのような描写は、構造の正確な伝達に至らないということが分かった。ということは、属性主体(鼻)を主題化しない場合には、本主体と属性主体の描写順に注意することが必要だということになる。

19-34) \*象が鼻が長い。

19-35) \*父親が彼が公務員だ。

19-36) \*長男が田中さんが結婚する。

というふうに描写したとすれば、本主体(象)がその单一属性(長い)のみを属性として保持するかのような描写(象が長い)になってしまい、構造の正確な伝達・再現に至らない。

ここから、属性主体(鼻)を主題化しない場合は、単位構造はばらばらに描写しないで、まとめて描写した方がよいということになる。

19-37) 象が「鼻が長い」。(象①は「鼻が長い」。)

19-38) 彼が「父親が公務員だ」。(彼①は「父親が公務員だ」。)

19-39) 田中さんが「長男が結婚する」。

(田中さん①は「長男が結婚する」。)

### [特徴6] 属性主体を主題化する場合

……聞き手の構造再現に混乱を生じる場合があることに注意

属性主体(鼻)を主題化する場合は、単位構造(鼻が長い)をばらばらに描写せざるを得ない。属性主体は主題化すれば文頭に出るからである。

19-40) 鼻①は象が長い。

19-41) ?父親①は彼が公務員だ。

19-42) ?長男①は田中さんが結婚する。

このとき、19-40) では意味の混乱は生じない。「象」と「鼻」とでは属性「長い」に対する両者の関係が明白であるからである。一方、19-41)

ではだれが公務員なのか、19-42) ではだれが結婚するのか、混乱が生ずる。というより非文に近い。本主体(彼、田中さん)と、属性主体(父親、長男)が属性(公務員だ、結婚する)に対して意味の上で同等の権利を主張しているからである。このような場合に属性主体(父親、長男)を主題化することは聞き手の混乱を招きやすい(正しい構造再現が保証されない)。

本主体と属性主体が属性に対して意味的に同等の権利を主張するような場合には、属性主体の主題化描写は避けるべきである、といえるだろう。

そのような場合以外は属性主体を主題化することに問題はない。先の例にもあたって、このことを確かめておこう。これらの例では19-41) や19-42) のような混乱は生じていない。

19-43) 子ども $\theta_1$ は彼が小さい。 ( $\leftarrow$  彼 $\theta_1$ は子どもが小さい。)

19-44) 人口 $\theta_1$ は東京が多い。 ( $\leftarrow$  東京 $\theta_1$ は人口が多い。)

19-45) 色 $\theta_1$ は茄子が紫だ。 ( $\leftarrow$  茄子 $\theta_1$ は色が紫だ。)

19-46) 発音 $\theta_1$ は彼が明瞭だ。 ( $\leftarrow$  彼 $\theta_1$ は発音が明瞭だ。)

19-47) 目 $\theta_1$ は彼が利く。 ( $\leftarrow$  彼 $\theta_1$ は目が利く。)

19-48) オシッコ $\theta_1$ はぼくが出る。 ( $\leftarrow$  ぼく $\theta_1$ はオシッコが出る。)

### [特徴 7] 本主体が複数ある場合

……「場の主体」「時の主体」／「本主体」「副次主体」

#### ① 「場の主体」「時の主体」

19-49) 彼が夏が調子が良い。 ( $\leftarrow$  彼 $\theta_1$ は夏が調子が良い。)

この文では、「調子が良い」(図19-18)という単位構造があり、その全体を主体「彼」が属性として保持している。これにさらにもう一つの「夏」という主体が現れている(図19-19)。

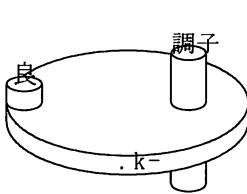


図19-18 調子が良い

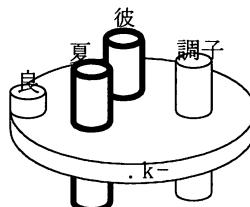


図19-19 彼のは夏が調子が良い

ここに来て、こういうことがいえるようになる。単位構造「調子が良い」の「実現する場」が主体「彼」であり、「実現する時」が主体「夏」である、と。「実現する場」として単位構造を属性にもつ主体が「彼」であり、「実現する時」として単位構造を属性にもつ主体が「夏」である、と。ここから、主体「彼」は「場の主体」、主体「夏」は「時の主体」と呼ぶことができる。

## ②「本主体」「副次主体」

それでは、その両者は属性である単位構造に対して同じ資格をもつものなのだろうか、ということが疑問になる。

19-49〉で、それについて何かをいおうとしている「それ」に当たるものは「夏」ではなくて「彼」である。したがって「彼」が本来的な主体、本主体である。これに「調子」が属性主体となっている。……「彼が調子が良い」。

「夏」は「彼が・調子が良い」という構造が成立する限りでの主体、つまり、主体としては「彼」と異なり、副次的な主体である。このことは、

19-50〉 彼が調子が良い。 (彼のは調子が良い。)  
は、これだけで完結した意味を構成するのに、

19-51〉 夏が調子が良い。 (夏のは調子が良い。)  
では、だれの調子か、何の調子か尋ねたくなることからも確認できる。

つまり、この場合、「場の主体」が主要な主体であり、「時の主体」が副次的な主体である、ということになる。「主体」には優先順位があるわけで

ある。主要な主体「本主体」と、副次的な主体「副次主体」である。ここでは「場の主体」が「本主体」、「時の主体」が「副次主体」となっている。

それでは、「夏」を「足」に換えた次のような場合はどうなのだろうか。

19-52) 彼が足が調子が良い。(彼の足が調子が良い。)(図省略)

ここでは「彼」も「足」も、「調子が良い」という属性の成立する「場」である。「彼」も「足」も、「調子が良い」という属性をもつ「場の主体」である。ここには、「場の主体」が二つある。

このような場合にも、主体に優先順位がある。等しく「場の主体」といつても、「彼」の方が本主体であり、「足」は副次主体である。「彼」は「場の本主体」、「足」は「場の副次主体」というわけである。

### ③ 同格主体……「と」「に」「や」を用いて描写

ところでまた、次のような形での複数の主体のあり方もあり得る。

19-53) 智ちゃん<sup>\*1</sup>や雄くん<sup>\*1</sup>が夏が調子が良い。



図19-20 智ちゃん<sup>\*1</sup>や雄くん<sup>\*1</sup>は夏が調子が良い

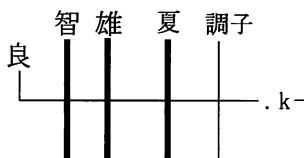


図19-21

19-49) との違いは、「場の主体」が二つあることであり、19-52) との違いは二つの「場の主体」が属性に対して同じ権利を主張することである。重要度が同じということである。「智ちゃん」と「雄くん」はいずれも「場の本主体」であり、全く同じ格にある。

同じ格にある実体を列挙して描写しているので「や」が使用されている。

\*1 「ちゃん・くん」は「(待遇)描写詞」であり、構造とは直接関係がない(5.2 表5-6)。しかし、「～ちゃん」全体を固有名詞として扱うことは可能である。

この「や」は、この構造伝達文法では、「と」や「に」と同様「同格実体列挙描写詞」と呼ばれるものである(5.2 表5-6, A1.3)。

それではまた、次のような文の構造はどうなっているのだろうか。

19-54) 智ちゃんや雄くんが夏と冬が調子が良い。 (図省略)

副次主体「夏」と同じ格に副次主体「冬」が添加された形式である。ここでは列挙するのに「や」ではなく「と」が使用されている。「と」はすべてを列挙するが、「や」は主要なもののみを列挙する。と、こういうだけでここではよしとしよう。この文の構造については、改めて言及する必要はないであろう。

#### [特徴8] 属性主体が複数ある場合

19-55) 彼が読書やテニスが趣味である。(彼の:は読書やテニスが~)

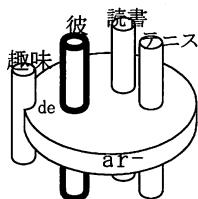


図19-22 彼の:は読書やテニスが趣味である 図19-23



ここでは、属性主体は「読書」と「テニス」であり、これが同格実体列挙描写詞「や」により列挙されて描写されている。このように属性主体が複数ある場合がある。

次の文でも同様に、属性主体が複数認められる(鼻、牙)。

19-56) 象が鼻と牙が長い。 (象の:は鼻と牙が長い。)

## 第20章

## 複主体が同一属性に立つ構造

## 20.1 複主体が同一属性に立つ構造

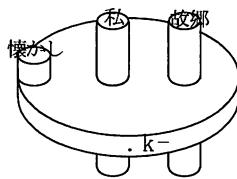
ここで扱う深層構造は、前の19章で扱った構造とよく似てはいるが、次の点で異なっている。すなわち、「象が…」の構造では「本主体」は単位構造を属性とし、「属性主体」は単一属性を属性とする、という差異があったのに対して、ここで扱う構造では各主体が単一属性をそのまま属性としている。

また、「象が…」で必要とされた主体間の関連性はここでは必要がない。

## 20.2 形容属性(形容詞)の場合

20-1) 私が故郷が懐かしい。 (私01は故郷が懐かしい。)

この構造の主体は「私」と「故郷」である(図20-1)。「懐かしい」という、意味的には感覚的な属性に対して、「私」は「それを感じる」という形でその属性を直接に保持する主体となっており、「故郷」は「私」(話者)の主観の中で「その感じを帶びている」という形でその属性を直接に保持する主体となっている。両者ともに主体である。そこで、「私」の方を「感覚主体」と呼び、「故郷」の方を「帯感主体」と呼ぶことにする。



(感覚主体)(帯感主体)



(感覚主体) (帯感主体)

図20-1

私が故郷が懐かしい

この構造には次の特徴がある。

- ① 「感覚主体」として可能なのは原則的に一人称に限られる(小説の地の文等では一人称以外でも可能である)。これは、この構造が話者自身の感覚のあり方そのものを反映したものである。
- ② 「感覚主体」と「帶感主体」の両者ともに単一属性の上に立っている。これは、どちらをも単一属性(懐かしい)の主体として描写することが可能であることから確認できる。

20-2) 私が懐かしい。 (私<sub>01</sub>は懐かしい。)

20-3) 故郷が懐かしい。 (故郷<sub>01</sub>は懐かしい。)

- ③ ただし、「感覚主体」が本主体で、「帶感主体」が副次主体である。これは、通常、次のうちでより安定した文は、感覚主体を<sub>01</sub>格にした 20-4)

の方であることから確認できる。

20-4) 私<sub>01</sub>は故郷が懐かしい。

20-5) 故郷<sub>01</sub>は私が懐かしい。

感覚主体と帶感主体をもつ形容属性を特に「感覚形容属性」と呼ぶ。

20-6) 私がお金がほしい。 (私<sub>01</sub>はお金がほしい。)

なども同じように扱うことができる。

### 20.3 断定属性(断定基)の場合

20-7) 彼がうどんが好きだ。 (彼<sub>01</sub>はうどんが好きだ。)

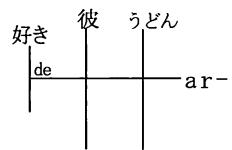
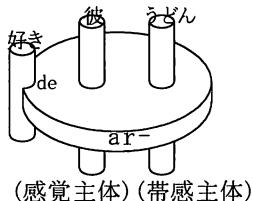


図20-3 彼<sub>01</sub>はうどんが好きだ

図20-4

「好きだ」は感覚断定属性を構成する。感覚主体が「彼」，帯感主体が「うどん」，属性が「(好きである)」であり，感覚主体が本主体，帯感主体が副次主体である。この構造には次の特徴がある。

① 「好きだ」を実体修飾描写するときは「好きな」というふうに格が変わる。

### 20-8) うどんが好きな彼

「好きだ」は，要素表記すれば  $suki-d=a-\emptyset$  となる。これは終止形(基本描写形)である。これを連体形(実体修飾描写形)にするには， $suki$  を  $de$  格から  $ni$  格へ「格移動」しなければならない…  $suki-n=a-\emptyset^*$  (図20-5, -6)。ただし，「うどんが好きである彼」という描写ももちろん可能である。

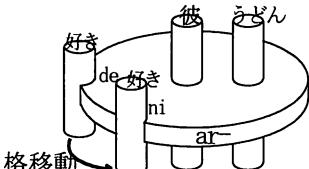


図20-5

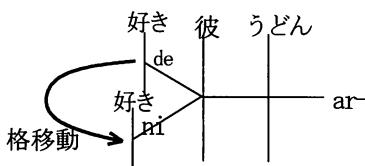


図20-6

② 帯感主体が有情物である場合，一方を主題化すると二義を生じる。

### 20-9) 一郎くんのは緑ちゃんが好きだ。

という文では，どちらがどちらを好いているのか，にわかに決しがたい。

これは，感覚主体と帶感主体のいずれもが属性に対して同等の権利を主張しているからである。とはいえ，文頭の主題化された有情物が感覚主体であるのが一般的ではある。

③ 帯感主体が有情物の場合，実体修飾描写をすると二義性が著しくなる。

### 20-10) 一郎くんが好きな緑ちゃん

### 20-11) 一郎くんの好きな緑ちゃん

ここでは 20-9) 以上に二義性が強まっている。

「嫌いだ」「必要だ」等も同様に扱うことができる。

\*1 国語文法の「形容動詞」の活用については 19.2 2)注 参照。11.3 「な基」も参照。

## 20.4 動属性(動詞)の場合

20-12) 彼がお金が要る。 (彼の)はお金が要る。)

20-13) 彼が英語が出来る。 (彼の)は英語が出来る。)

「要る」「出来る」という動詞は目的語と考えられる名詞をなぜ主格形式で表現するのか、ということが疑問とされる。どう考えればよいのだろう。

『岩波古語辞典』によれば、「要る」はもともと「入り」であり、「必要物の中に入る」という意味であった。とすれば、20-12)では「必要物の中に入る」という属性をもつただから、「お金」が主格に立つことは当然のことである。このような主格は語源に遡ると理解しやすくなるという意味で、「語源主格」と呼んではどうだろうか。現代語では感覚のズレが生じているが、「を格」に格移動するまでには至っていない。

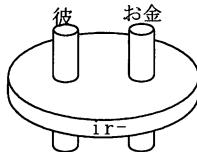


図20-7 彼の)はお金が要る

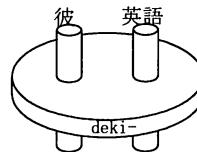


図20-8 彼の)は英語が出来る

20-12) のもう一方の主体「彼」は、「お金が必要物の中に入る」という属性を「場」として保持する「場の主体」(本主体)である。それで主格形式「～が」をとるわけである。が、ここでの「場」は「に格」で表すこともできる。

20-14) 彼にお金が要る。 (彼の)はお金が要る。)(構造図は省略)

「彼が」と「彼に」の両方の構造形式が可能なわけである。

20-13) では、「出来る」という動詞が使われている。同辞典によれば、これはもともと「①出現する、②物が生成する、完成する」等の意味をもつという。であるならば、「英語が出来る」というのは、主体「英語」が「出現する、完成する」という属性をもつことになり、「英語」が主格に立つのは当然のことであると言える。これも「語源主格」である。

「出来る」の場合の「彼」が「に格」をとる可能性のある「場の主体」であることは、「要る」の場合の「彼」と同様である。

## 第21章

# 態複主体／上置きあり複主体

### 21.1 態による複主体

21-1) 彼が英語が分かる。 (彼のは英語が分かる。)

21-2) 彼が英語が読める。 (彼のは英語が読める。)

21-3) (私が)富士山が見える。 (<私のは>富士山が見える。)

動詞が「分かる」「読める(可能動詞一般)」「見える」などの場合、なぜ複主語が生じるのかが疑問とされる。これについては 12.3 及び 12.4 で触れたが、簡単に再説しておこう。

「分かる」の場合は、wak-ar- というふうに構造分析でき、wak-の主体(彼)と-ar-の主体(英語)の2つが表層で主語となっており、「読める(可能動詞一般)」の場合は、yom-e- というふうに構造分析でき、yom-の主体(彼)と-e-の主体(英語)の2つが表層で主語となっている。「見える」も同様である。

つまり、いずれも、態属性(受動態-ar-と許容態-e-)がもたらす複主語の現象なのである。(「～には～が分かる、～には～が読める、～には～が見える」の場合についても 12.3 及び 12.4 を参照。)

## 21.2 上置き構造を伴う構造

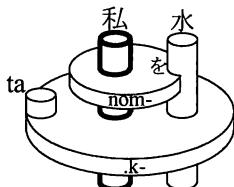
21-4) 私が水が飲みたい。 (私のは水が飲みたい。) nom-i=ta. k-図21-1 私のは水が飲みたい

図21-2

「たい(ta. k-)」は、この文法が「下受け実体」と呼ぶ形容実体の一つである「ta<sup>\*</sup>」を用いた感覚形容属性である。単独で構造を構成することなく、必ず動属性を中心とした他の構造(私の水を飲む)を上に載せる。この上に載せる構造を「上置き構造」と呼ぶことにする。「たい」の構造は、上置き構造が現実世界に実現することを話者が望んでいることを意味する。

感覚形容属性であるから、複主体が可能である。感覚主体は原則的に一人称の実体であり<sup>\*\*2</sup>、帯感主体は上置き構造の本主体(私)以外の実体である。帯感主体は21-4)の「水」のように上置き構造中の「を格実体」であることもあり、21-5)の「飛行機」のように「に格実体」であることも、21-6)の「オシッコ」のように「主格実体(属性主体)」であることもある。

21-5) ぼくのは飛行機が乗りたい。 (←飛行機に乗る)21-6) ぼくのはオシッコが出たい。 (←オシッコが出る)

描写に際して、上置き構造の格関係が生かされる場合もある。欲求そのもの(下受け構造)よりは事態の論理関係(上置き構造)を重視する場合や、上置き構造が複雑な場合である。その場合には21-7)や21-8)のように帯感主体はその格(を格、に格など)のままで表層化される。

21-7) 私のは(どんぶりで一気に)水を飲みたい。<sup>\*</sup>1 「(私のは)この機械が使いやすい／にくい。」の「やす」「にく」も同様。<sup>\*\*2</sup> 「読みたければ」のような条件提示等の描写では、一人称以外でも可能。

21-8) ぼくのいは(機体に動物の絵の描いてある)飛行機に乗りたい。

『日本文法大辞典』「たい」の項によれば、複主語での描写と、上置き構造の格関係を生かしての描写とは、室町時代から共存しているという。

なお、この構造の感覚主体を三人称の主体にするには、下受け実体(ta)と動辞(.gar-)を用いて融合動詞<sup>1</sup>(ta.gar-)を作り、これを属性とすればよい。

21-9) 彼が水を飲みたがる。 (彼のいは水を飲みたがる。)

この属性 ta.gar- では、「水」が .gar- の主体になっていないので、

21-10) \*彼が水が飲みたがる。 (\*彼のいは水が飲みたがる。)

のような形での複主語描写はできない。

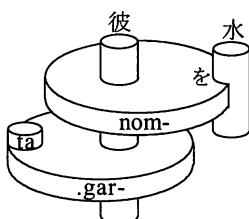


図21-3 彼のいは水を飲みたがる

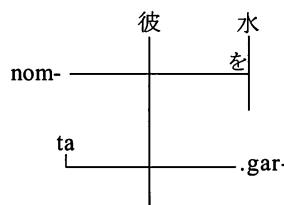


図21-4

◎ 複主体の構造は、韓国語にも見出される<sup>\*2</sup>が、日本語特有の構造もある。さらに考察を続けていきたい。

\*1 「融合動詞」については 7.2 及び A17. 1④参照。

\*2 韓国語には形容詞述語文で「象は鼻が長い」に代表される同様の構造があり、また、次のように複主体をとる twe-da (なる)という動詞もある。

mur-i ᄠrüm-i twen-da.

水-が 氷-が nar-u. (「水が氷になる」という意味)